資料３－１

大泉桜学園の検証におけるヒアリング記録（教職員）の総括

１　９年間を見通したカリキュラムを作成・実施することにより、発達段階に応じた計画的・継続的な学習指導および生活指導の充実を図ることができる。（主に学習指導、体力向上）

- 指導の重点など学習指導上の要望を率直に伝えるなど、学習内容や指導の在り方、授業の協力やカリキュラム開発等に関する相互理解や協力、指導の工夫が生まれている。
- 授業協力やカリキュラム開発等の研究活動について、教員は校種を超えて相互に協力しており、練馬区教育委員会教育課題研究指定校として学習内容と学習規律、必要な能力に関するカリキュラム開発に取り組んでいる。
- ４－３－２の区切りについては、３－３－３の方がよいとの意見もあったが、その意義やねらいについて理解し、教育活動の充実を図っている。
- ５０分授業や一部教科担任制を体験することは、６年生から７年生への円滑な接続についての効果が認められている。
- 一部教科担任制に対して児童は早く慣れ、教員も児童理解を深めるとともに教材研究の充実が図られている。
- ５０分授業について５・６年生の児童は早く慣れ、教員も増加する５分を演習や振返りの時間など授業の充実に活用している。
- ２０分の休み時間がなくなったり給食時間が短くなったりしたことについての課題を指摘する意見がある。
- 児童・生徒の学習のつながりや育ちのプロセスが見えやすく、若手教員の育成にも効果がある。
- 通知表の様式や評価・評定の６年生から７年生への段差について課題を感じ、検討している。

２　小学校から中学校へ進学する際の段差を緩やかなものにし、円滑な移行が図れる。その結果、不登校生徒を減少させることもできる。（主に生活指導、特別支援教育）

- ５～７年の担当教員の連携が図りやすくなっているとの意見がある一方、教員の共通理解が十分ではないとの意見もある。
- 小学校籍の教員は進学した児童を見ることができ、中学校での成長が理解できるようになる。
- 小学校籍の教員がいることや児童・生徒が８・９年生の姿を見てきたことによる安心感は、７年生の学校生活への適応に役立っている。
- 転入した教員が小中一貫教育校の生活指導の方針等を理解する方法に課題がある。
- 生徒は上級生や教員、学習等に関する不安が少なくなる一方で、緊張感がなくなる、７年生に幼さが見られる、上級生に対する言葉づかいに課題が見られるなどの指摘がある。
- ４年生は、５年生から始まる西校舎の学校生活に対して心構えが生まれている一方、４

年生から５年生への段差が大きいとの意見もある。
・ 上級生は下級生に優しく穏やかになっている。
・ 標準服の着用率は上がっており、６年生以下でも保護者へ事前の協力依頼がなくても標準服に準じた服装を着用するようになった。
・ 学校生活のきまりなど、小学校と中学校の違いを生かして指導することがあるため、Ⅱ期の児童・生徒に対する指導には難しい面がある。
・ ７年生以上の生徒への指導では、６年生までの情報を生かしたり５・６年生の生活指導に中学校籍の生活指導主任が関わったりすることで指導の効果を高めている。
・ 成長のモデルが身近にあることをはじめ、７年生の学級編成に６年時担任が協力している。
・ ５・６年生の相談室や保健室の利用、養護教諭の役割分担等は二つに分かれるが、５・６年生については発達段階に合わせて両方を利用できるようにするなどの対応を工夫している。
・ 学校医は１～６年生と７～９年生で担当医が分かれている。同じ学校医がいいとの意見もある。
・ 体格は良くなり、体力面では投力が全学年で低い。状況判断の力について課題があるとの意見もある。

３　幅広い異年齢集団による活動を通じて、豊かな人間性や社会性の育成ができる。（主に道徳、総合的な学習の時間、特別活動、進路指導）

・ 運動会で上級生が下級生の世話をしたり運営にかかわったりする姿を通じて、下級生は将来の自分のイメージをもちやすくなっている。
・ ８・９年生に次のステップやロールモデルを示すことが課題との意見がある。
・ 桜祭や運動会に対する考え方は、小学校籍の教員と中学校籍の教員で違う面がある。
・ 入学式や卒業式については、元々の良さがいい形で融合している。
・ ７年生で飯盒炊さんや防災リーダー等の経験ができる機会を多く用意できたのはよい。
・ ４年生は委員会委員長や縦割りの班長について意欲をもって参加し、４年生が中心になってまとめていくことができることが分かるなど、成長を感じている。
・ 交流給食は児童・生徒が顔見知りとなるきっかけになり、学校行事などにつながるとともに、児童が中学校を理解して身近に感じている。
・ ７年生は５・６年生がいることで先輩としての振る舞いができる。
・ Ⅱ期については、７年生におけるリーダー性の育成について飯盒炊さんや防災リーダーの取組を通じてその効果や意義を感じている一方で、何を身に付けさせたいか共通理解が十分ではないとの指摘もある。
・ ９年間を通してリーダーを３回経験する機会があると捉える一方、６年生のリーダー性の在り方について、中学校進学時のリセット感など、Ⅱ期に関する教員の中に戸惑いや

課題意識が見られる。
- ５・６年生の部活動での怪我が多い。練習内容に関する教員側の意識も課題である。
- 道徳教育について９年間を見通したカリキュラムを立て、命の教育に全員で取り組んだのは良かった。
- 特別活動に対する小学校籍の教員と中学校籍の教員の意識の違いはあったが、相互理解が進んで行事が改善され、よい協力関係が築けている。
- キャリア教育などⅢ期の成長を支える取組が必要ではないかと思う。

４　小学校の教員と中学校の教員の相互協力関係が今まで以上に構築でき、学力や体力の向上等の高い教育効果を上げることができる。（主に学校運営）

- 教員の相互理解が土台となり、連絡調整がしやすく協力的な関係が生まれている。
- ５・６年生と７年生の教員は座席が近いことや指導した生徒をはさんで話ができるようになっている。
- 管理職の中でも小学校籍と中学校籍のちがいがあり、相互理解に努めていた。
- 副校長３人の仕事分担について、学年や分掌、委託業務の管理等の分担はあるが、統括する副校長を中心に調整しながら相互に連携している。大きな問題への対応などがある場合は、担当を越えて動いている。
- 事務体制は、都費の事務職員が２名、区の非常勤職員が１名、臨時職員が２名の計５名体制なので互いに話し合いながら仕事ができている。
- 会計管理や給与、振込手続き、調査回答等、学校名や住所の扱い方は内容に応じて小学校、中学校、小中一貫教育校と分けて対応している。
- 区では予算が小学校費と中学校費が分かれているため、予算の執行について、消耗品は中学校費、芝生など小学校限定のものは小学校費で出すなどの対応をしている。
- 開校当初は、備品台帳を一つにしてもらえなかったので何度も区にお願いするなど、教育委員会事務局や区役所側の対応にも課題があった。
- 栄養士が二人いる体制は、互いに協力して対応できるので助かっている。
- 開校前の協議等で理解できなかった相手校種の考えについて、職員室が一緒になることで理解できるようになった。
- 連絡調整は必要であり増えたが、仕事が増えたとはあまり感じていない者もいる。
- 研究での連携と進め方については、互いに授業を見合い授業について意見を言わない印象があった中学校籍の教員が互いの授業を見合い話すようになった。
- 異動による教員の入れ替わりにより、開校当初のねらいが変わることを懸念する声もある。
- 教務主任は二人であるが、分業しながら調整して管理職に相談している。
- 学校納付金や就学援助について、保護者の理解や手続きについて丁寧に説明し、対応することが科必要である。

5　地域社会と連携した特色ある学校づくりを推進し、魅力ある学校とすることによって、保護者や地域社会からの信頼を得られる。その結果、学校と地域社会の活性化を図ることができる。（主に保護者、地域）

（ヒアリング記録については、別途提示する。）

6　施設整備における効果と課題 職員室、東校舎・西校舎、渡り廊下、校庭、ランチルーム、多目的室、プール、体育館、学習室、保健室、相談室、個別学習室、学校図書館ほか

- 職員室が一つであることの意味と効果が大きい。
- 職員室が一緒になることで初めて分かることがあるなど、相互理解が進んでいる。
- 小学生が保健室に求めるニーズと、中学生が保健室に求めるニーズはかなり違うこともあり、保健室が二つあることでやりやすい。
- 給食は１・２年生、３・４年生、５・６年生、中学生で摂取基準が分かれており、量の調整で対応している。
- 中学生の給食は、摂取基準から小学生よりも一品多くしたいところであるが、給食指導をする教員に配慮して品数は増やさずに量で調整している。
- 品数を増やせば小学校籍の教員と中学校籍の教員で食べるものが変わってしまうことになるので。教員は中学生の量で提供している。
- 開校時に食器の数も９種類に増やし、大きさを１～４年生までのものとそれ以上の学年用で揃えた。
- 栄養指導の面で、子供の育ちを９年間でみられるようになるなど、食を通じて子供たちの変化や育ちを見ることができ、声がけができる。
- 校舎で給食の時間が異なるので、時間差で作ったりする。
- 学年によって食材を切る大きさを変えたり、児童・生徒の発達段階に応じて配食しやすいものを考えたりしている。
- 階段の高さや跳び箱の高さ、黒板の高さなど、小学校と中学校で規格が違うものへの対応や、西体育館のスロープや西校舎の昇降口のドアにゴムを貼るなど、様々な年齢の児童・生徒が使用できるように安全面での対応をした。
- 家庭科室は一つにして５～９年が使っていることの課題、理科室が二つであることの課題が指摘されている。

7　小中一貫教育の課題を解決し推進するための先導的な役割、通学区域と学校選択制度、教育委員会の役割

（ヒアリング記録については、別途提示する。）